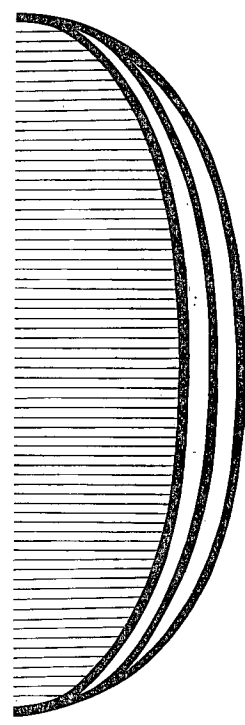


二分、厚サ三分、楯ノ背ニ淺ク鑿タル穴十三アリ、元青貝ヲ入タル物ニテ、今ヌケタル跡ナリ、間青貝ノ見ユルモアリ、穴ノクバリ、皆三二三三トアリ、木ハイスト云フ、

〔類聚雜要抄四〕

伏輪各三正 銀三分 二隻四枚也



〔嬉遊笑覽容儀一下〕同書類聚雜要抄銀にて、伏輪ある細き形の楯あり、略中伏輪は、今、銀むねといふと同じ、

〔笑委集十二〕七が、いでたつ玄やうぞくには、略中黒髪島田とかやにゆひあげ、銀ふくりんに、蒔繪かきたる、玳瑁の楯にて前髪をおさへ、紅粉を以て面をいろどり、さもあてやかにいでたちけり、

〔我衣〕正徳ノ比、厚ムネノ木グシ流行、棟ニ金銀粉ニテイツカケヲシタリ、甚宜ク見ヘタリ、

〔嬉遊笑覽容儀一下〕透しの楯は、其後元文頃より近く天明迄も行はれたり、略中其後はやれるは、齒の

處、玳瑁水牛にて、たけ短く面を廣くして、銀の覆輪、種々の模様をすかしに造りたり、

〔類聚雜要抄五節雜事〕一可儲本所物 蒔繪楯

〔歷世女裝考二〕蒔繪の楯 三ツ楯

江戸にても、享保の比まきゑる楯、流行しと古老語れり、又楯の峯に銀のふくりんを懸たるに蒔繪

したる物はやり、明和に至ては、まきゑすたれ、堅一寸六分、横六寸許りの甲のべつかふの楯はや

りしとぞ、横長のくしは、根なし草にも見ゆ、天明より後文化まで四十五年の間は、まきゑのくし世にすた

りしとぞ、横長のくしは、根なし草にも見ゆ、天明より後文化まで四十五年の間は、まきゑのくし世にすた